

## 北海道を守った樋口季一郎中将

樋口季一郎中将  
(樋口隆一氏提供)

今回の特集記事では、樋口季一郎中将を特集します。札幌市豊平区月寒、ハローワーク札幌東や札幌南税務署からほど近い一角に、小高い木々に囲まれた赤レンガ造りの瀟洒な洋館が建っています。なんの建物なのだろうと以前から気になっていたところ、洋館の歴史を探っていくうちに樋口季一郎中将という人物にたどり着きました。「命のビザ」として有名な杉原千畝氏のことはよく知られていますが、樋口季一郎中将のことはあまり知られていません。ユダヤ難民を救い、北海道を守った陸軍中将について、少しでも興味を持っていただく機会になればと思います。



## 断乎、反撃に転じ、上陸軍を粉碎せよ

昭和20年8月18日午前2時頃、占守島(しゅむしゅとう)の竹田浜沖に、2隻の駆逐艦と海防艦の援護射撃のなか、輸送船14隻が約8,800名のソビエト連邦の兵士を乗せて現れ、奇襲攻撃を開始しました。

占守島は千島列島の最北端に位置する国境の島であり、全長約25キロメートル、幅は約12.6キロメートル、周囲約64キロメートルの楕円形の島で、面積は約385平方キロメートル。沖



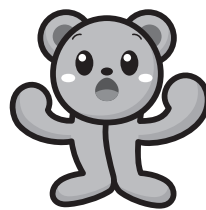
占守島の戦い

縄本島の3分の1弱ほどの大きさです。占守海峡を挟んでロシア(当時ソビエト連邦、以下「ソ連」)のカムチャッカ半島が広がります。明治8年(1875年)にロシアとの樺太・千島交換条約により、得撫島(うるっぷとう)から占守島までを日本領とし、樺太をロシアの領土とすることになりました。その後日露戦争に勝利した日本はポーツマス条約により樺太の南半分を獲得することになります。

占守島の北側に竹田浜という島で唯一の広い砂浜があり、大本営はアメリカ軍が上陸してくるのは竹田浜からになると予想して、砲台や陣地を築いていました。ソ連軍が上陸したとき、北千島を守る日本軍は第91師団の将兵約23,000人、しかしながらその大部分は占守島の南側の幌筵島(ばらむしろうとう/ほろむしろうとう)に配備されており、占守島にいたのは約8,500人のみでした。

昭和20年8月14日午後11時、終戦の詔書が発布、日本はポツダム宣言を受諾し、翌日15日正午、天皇陛下が国民に対して終戦したことを発表します。大本営は18日午後4時をもって、自衛のための戦闘を含め一切の戦闘行動を停止することを徹底するように命令しました。占守島の日本軍は武装解除に向けて戦車から戦車砲や無線機を外し、弾薬の信管を抜き、燃料の入ったドラム缶を地下陣地に埋め、戦車を海中に投棄する準備を整えているところでした。兵士たちは家に帰れる喜びを胸に、戦闘の緊張感から解放されていた頃であろうと想像されます。そのような夜、ソ連軍は竹田浜にまず150発ほどの砲弾を打ち込み、奇襲攻撃を開始したのです。





当初、竹田浜の北、国端崎(こくたんざき)監視哨からの報告を聞いた将兵の多くは、アメリカ軍が上陸してきたと思ったと言います。やがてすさまじい艦砲射撃のもと、8,800人のソ連兵が竹田浜に殺到。状況を伝える電文は、第五方面軍司令部(札幌)まですぐに届きます。北千島を守っていた第91師団を率いる司令官の樋口季一郎中将(以下敬称略、「樋口」とします)は、大本營の、この日の午後4時をもって戦闘行動を完全に停止するという指示を考慮に入れながらも、第91師団に対して打電します。

「断乎、反撃に転じ、上陸軍を粉碎せよ」

樋口はロシア通であり、ロシア(ソ連)の考え方をよく研究していました。ソ連は8月8日に日ソ中立条約を一方的に破棄して日本に対して宣戦布告をし、9日には北満州、朝鮮北部、樺太への侵攻を開始しています。各地で行われたソ連兵による、武装解除した日本兵や逃げようとする民間人への暴力、残虐行為についても、樋口は知っていました。もしここで日本軍が戦わなければソ連軍は一気に千島を南下し北海道まで攻め入り、地上戦となるであろう。そのような事態はなんとしても防がなければならない。終戦のための準備を進めていた占守島の日本兵は、敢然とソ連兵に立ち向かっていきました。

それまで一般の日本国民が名前も聞いたこともないような辺境の島である占守島において、激しい戦闘が繰り広げられたことは、北海道民にもあまり知られていません。ソ連のスターリンは、釧路と留萌を結ぶ線の東側をソ連の占領地とすることをトルーマン米国大統領に要求していました(トルーマンはそれを拒否)。占守島は一日で占領し、そのまま兵士を南下させ、一気に北海道東部を占領、さらには東北の一部と東京都の半分を保障占領する予定でした。

敢然と戦った第91師団の将兵たちは、何度もソ連軍に占守島深部まで押し込まれそうになりながらも押し返し、戦闘を優位に保ったまま、22日にソ連軍との間で停戦を合意し、戦闘では優位にたちながらも武装解除を行いました。ソ連軍は多大な損害を出し、スターリンは北海道への侵攻を諦めたといえます。もし樋口が大本營の指示に従って武器を捨て、ソ連軍への反撃を行うように命令をしなければ北海道はどうなっていたのでしょうか。北海道はロシア領となり、日本もドイツと同様東西に分断したままだったかもしれません。

占守島における戦闘での死傷者は、日本側の推定によれば、日本軍の死傷者約600名、ソ連軍の死傷者は約3,000名。ただし、武装解除後、戦死者の確認や収容を認められないまま、将兵たちの多くはシベリア等へ抑留されることとなります。そのため、死傷者の正確な数はつかめないままです。



## 出生からオトポール事件まで

樋口は1888年(明治21年)8月20日、淡路島の阿万村(現在の南あわじ市)で生まれました。1905年(明治38年)9月1日には東京市ヶ谷の中央幼年学校(後の士官学校予科)へと進学、いわゆる士官候補生となります。同期生には石原莞爾がおり、後々まで親交を結ぶことになります。1907年(明治40年)5月に中央幼年学校を卒業。1909年(明治42年)、樋口は第21期として陸軍士官学校を卒業し、結婚後、陸軍大学校へ入学、陸軍幹部への道を進み始めます。

1919年(大正8年)12月にはウラジオストク派遣軍司令部付の辞令を受け、その後ハバロフスク特務機関長などを経て、ポーランド駐在武官となります。駐在武官としてのワルシャワでの生活は3年に及び、幅広い人脈を築きます。ポーランドから帰国後は中国・青島への派遣などがあり、1937年(昭和12年)8月8日、樋口は陸軍省よりふたつの辞令を受けます。ひとつは大佐から少将への昇進、もうひとつは、関東軍司令部付としてハルビン特務機関長への就任の辞令です。この辞令が、「オトポール事件」へとつながる人事となります。



オトポール事件：ヒグチルート (樋口季一郎記念館提供)

オトポール事件とは、1938年（昭和13年）3月、ナチスの弾圧から逃れてきたユダヤ人の避難民が、ソ連と満州の国境近くの駅であるオトポールに足止めされ、零下数十度という吹雪のなか命の危険にさらされていたところ、樋口が奔走して特別列車を手配させ、ユダヤ人避難民を救出した事件です。

当時のソ連政府はナチスドイツに配慮して、ユダヤ人避難民に対して領土の通過ビザは発給しましたが滞在は拒否していました。シベリア鉄道の貨車に乗って大挙して逃れてきたユダヤ避難民の人々は、対ドイツに気兼ねしてビザ発行をしづる満州国に入国ができず、食料も尽き、凍死や餓死寸前のなかにいたのです。ハルビンのユダヤ人協会会長のアブラハム・カウフマン博士からユダヤ人避難民の窮状を知った樋口は、満州国に対して救出を指示しました。樋口はそのとき、職を解かれることも覚悟していたようです。樋口は満州国外交部への働きかけとともに南満州鉄道の松岡洋右総裁へ電話をして特別列車を要請、救援のための13便の特別列車が救援列車として出動しました。それから二日後、多くの避難民を乗せた救援列車がハルビンに到着し、避難民全員がハルビンの病院などに収容されました。

ドイツ政府は樋口のこの措置に反発し、日本政府に対して公式に抗議書が届けられました。樋口の独断といえる行動は関東軍内部でも問題となりましたが、当時の関東軍司令官である植田謙吉大将に対し、樋口は自分の考えをしたためた文書を郵送します。

「満州国は日本の属国でもないし、いわんやドイツの属国でもないはずである。たとえドイツが日本の盟邦であり、ユダヤ民族抹殺がドイツの国策であっても、人道に反するドイツの処置に屈するわけにはいかない。（一部抜粋）」

この書簡は再び軍司令部内で問題となり、軍司令部に出頭した樋口は東条英機参謀長と会い、そのときに言い放った言葉が現在でも語り草となっています。

「参謀長、ヒットラーのお先棒を担いで弱い者いじめをすることを正しいと思われませんか」

東条は樋口に懲罰を課すことをせず、植田大将も樋口の行動を理解し、軍司令部内での樋口に対して懲罰を求める声はやがてなくなりました。

樋口が指導したことによって発給されたビザにより、諸説ありますが最終的に2万人ものユダヤ人避難民が救出されることになりました。そのうちの多くが上海などを經由してアメリカに逃れたといえます。この「ヒグチ・ルート」は1941年（昭和16年）6月に独ソ戦が始まるまで有効であったようで、その3年の間に数多くのユダヤ人が逃れていったとのことでした。



## 戦後の樋口季一郎

終戦後、樋口が使用していた月寒の官邸は進駐軍に接収されることになり、樋口は官邸を出て、復員監として半年ほどの期間、将兵たちの復員業務に携わります。1946年（昭和21年）の春には復員監の職も解かれ、樋口と家族は小樽郊外の朝里にあった知人の社宅へと移り、新たな生活を始めました。樋口家の生活ぶりはがらりと変わり、恩給もない困窮生活となり、大変な苦労を重ねています。

樋口家がそのような耐乏生活を送るなか、札幌駐屯のアメリカ軍CIC隊長のジム・キャッスルが樋口のもとを複数回訪れ、調査をしています。調査というのは、樋口が率いていた第五方面軍が、アメリカ軍の捕虜（約1,600人）に対しどのような処遇を行っていたかというものでした。調査を進めるうち、一切不正や虐待等はなく公正に捕虜を扱っていたことが判明し、アメリカ軍内での樋口の評価は高まっていきます。ジム・キャッスルは樋口を「あなたは偉大なる人道主義者である」とまで言い、樋口を高額で特別顧問に雇いたいと申し出たほどでしたが、樋口はそれを断っています。

朝里での生活を送るなか、水面下で樋口に危機が近づいていました。ソ連極東軍が樋口を「戦犯」とし、連合軍総司令部に引き渡しを要求してきたのです。しかし、マッカーサーはそれを拒否しただけでなく、「ヒグチは人道主義者である」と擁護したのです。実は、マッカーサーのその行動の裏には、ニューヨークの世界ユダヤ会議の動きがありました。満州で樋口に命を救われたユダヤ難民の人たちが声をあげ、アメリカ国防総省に対してソ連の要求を断るよう強く働きかけたのです。水面下でそのようなことがあり、命を救われたことを、樋口はそのときは知りませんでした。



札幌護国神社境内：北千島の慰霊碑



札幌護国神社境内：アッツ島玉砕の碑

1947年(昭和22年)12月まで樋口家は朝里で暮らし、その後は宮崎県小林市に転居します。結局、恩給が出るようになったのは、終戦から10年以上経ってからでした。

札幌の護国神社の境内の一角に、「アッツ島玉砕雄魂之碑」が建っています。1968年(昭和43年)、この碑の除幕式が行われ、樋口も参加しています。アッツ島は日本軍初の「玉砕」があった島であり、樋口はそのときの司令官でした。樋口は、日本軍初の玉砕戦の司令官という汚名を背負うことになりました。大本營の方針に従わざるを得なかったとはいえ、樋口は自らの命のもと、玉砕をさせることとなってしまったアッツ島の将兵たちのことを忘れることはできませんでした。アッツ島の玉砕と引き換

えのような形で、キスカ島の奇跡的な完全撤退が遂行されることになります。

樋口は晩年、東京都文京区の自宅で静かに余生を送り、1970年(昭和45年)10月11日に息を引き取ります。自室に飾られたアッツ島を描いた絵の前で、毎朝、死んでいった部下たちの冥福を祈っていたといいます。享年82歳でした。

## つきさっぷ郷土資料館

札幌市の月寒に、北部軍司令官官邸であったレンガ造りの2階建ての洋館が大事に残されています。官邸の裏には樋口も住んでいた木造平屋の住まいがありましたが、こちらはすでに取り壊されてしまっています。戦後は進駐軍に接收されていましたが、昭和25年から昭和58年までの間、北海道大学の月寒学寮として使用されていました。その後寮は閉寮となり、この建物は札幌市が国から譲り受けることになります。そして昭和60年からは、月寒町内会連合会が札幌市と協定を結び、「つきさっぷ郷土資料館」として無料で一般公開されています。運営は秋元靖巳館長をはじめとして、すべて運営部員がボランティアで行っています。



つきさっぷ郷土資料館 展示品

展示資料は約4千点あり、農耕・林業、生活、旧軍隊、古文書の4部門に分けて展示されています。

樋口が実際に着用していた軍服も飾られていますが、その軍服に勲章はついていません。戦後、樋口は自ら勲章を取り外したと言います。司令官としてのけじめのひとつであったのかと想像されます。建物の優美さと資料の豊富さは一見の価値ありかと思われま



つきさっぷ郷土資料館 外観

### [つきさっぷ郷土資料館]

札幌市豊平区月寒東2条2丁目3-9

電話番号 011-854-6430

開館日(4月~11月) 毎週水曜日・土曜日 午前10時~午後4時

※開館日等は新型コロナウイルスの感染状況によって変わる可能性があります。





## 樋口季一郎記念館

石狩市高岡・五の沢地区に、「樋口季一郎記念館」があります。2020年(令和2年)9月15日に開館しました。記念館は1910年(明治43年)に建てられた旧山谷農家住宅を再生した宿である、古民家の宿「Solii」敷地内にある札幌軟石の蔵を利用して開設されています。樋口季一郎が使用していた執務机をはじめ、樋口の功績や生活に関わる資料や、孫の樋口隆一氏とハルビンの生存者の子息が対面したときの写真など、説明パネルを読み進めていくと樋口の足跡をたどることができます。

記念館の江崎幹夫館長は一般社団法人北海道古民家再生協会の理事長もされており、北海道の地に、樋口季一郎の情報を発信する場として、樋口隆一氏や自衛隊のご協力のもと、記念館の運営と維持に尽力されています。小さな記念館ではありますが、多くの方が訪れているようで、開館から約1年後、2021年(令和3年)10月には見学者が1,000名に達しました。なお、樋口季一郎の出身地である淡路島と北海道の2箇所に銅像を建立する計画が進められております。詳細は「樋口季一郎中将顕彰会(電話番号03-3262-5226)」まで。



樋口季一郎記念館 内観 右奥の机は樋口季一郎の執務机(樋口季一郎記念館提供)



樋口季一郎記念館 外観

### 樋口季一郎記念館

石狩市八幡町高岡103-3  
 電話番号 090-9755-8058  
 開館日 木曜日～日曜日 午前11時～午後3時  
 冬季12月～3月は予約制  
 大人(高校生以上)500円、中学生以下無料

### 古民家の宿Solii

2019年(令和元年)10月24日にオープン。北海道の田園風景のなかに佇む古民家の宿です。「yama(母屋を改築)」と「tani(納屋を改築)」の二棟がそれぞれ宿泊できるようになっており、地元食材を使った石狩鍋など四季折々のお食事をいただけます。「樋口季一郎記念館」と合わせてどうぞ。

石狩市八幡町高岡103-3  
 電話番号 080-3234-1387  
 E-mail: solii.ishikari@gmail.com



樋口季一郎記念館 古民家の宿Solii  
 (左の蔵が記念館。右側2棟が古民家の宿Solii)

【参考文献】「陸軍中将 樋口季一郎の遺訓 ユダヤ難民と北海道を救った將軍」 樋口隆一 編著 勉誠出版  
 「指揮官の攻防 満州とアッツの將軍 樋口季一郎」 早坂隆 文春新書  
 「ユダヤ難民を救った男 樋口季一郎・伝」 木内是壽 アジア文化社  
 「北海道を守った占守島の戦い」 上原卓 祥伝社新書